

(課程博士・様式7) (Doctoral degree with coursework, Form 7)

学位論文要旨

Summary of Doctoral Thesis

専攻：教科開発学

氏名：今井 隆夫

Course : Subject Development

Name : IMAI, Takao

論文題目：感覚英文法による言語表現の意味づけ指導の効果

Title of dissertation : The Effects of Teaching Linguistic Motivation through Image English Grammar

論文要旨：

Summary :

本論文は、英語学習者に英語母語話者が持つ英語感覚を身に着けさせることを目的に、「感覚英文法」を用いて、言語表現の意味的動機付け (Linguistic Motivation) を教えることの効果について教室での実験授業及び調査の結果から論ずるものである。「感覚英文法」とは、筆者の学習経験、授業実践、及び認知言語学の道具立てを参照して開発してきた学習英文法のことであり、説明が比喩的・アナロジカルであるため、学習者の既存の知識に取り込みやすいことを特徴としている。Linguistic Motivation とは、言語の恣意性 (arbitrariness) の反対の概念で、ある表現がなぜそのような表現になるのかの意味づけをすることであり、認知言語学の主要な道具立てである。具体的には、以下の4つの点について検証した。

(1) 高校までに英語学習をある程度終了した中堅レベルの大学生 (ボリューム層という意味で、大学生のプロフィールと言える) が母語話者の英語感覚を身に着けていない現状を確かめた。

(2) 「感覚英文法」の明示的指導の効果について調べた。

(3) 学習者の比喩能力を活性化することで、学習者が既存の知識に関連づけて新たな内容を学ぶことができることを調べた。

(4) 感覚英文法の授業を学習者が、「価値があり」、「学ぶこと自体が楽しい」と感じることを明らかにした。

本論文の構成は、次のとおりである。第1章では、論文全体のアウトラインを述べた後、教科開発学の枠組みに、本研究がどのような形で当てはまるかを述べる。要点を述べると、教科専門として認知言語学、教科教育として英語科教育法、教育環境学として学習者の学習スタイルと動機付けである。第2章は、言語教育研究を行う際に、研究者の言語観・コミュニケーション観について述べるのが重要であると考えるので、著者の言語観、コミュニケーション観に関わる理論的枠組みについて述べる。第3章は、上記(1)について、大学生339名を対象とした調査結果を示し、ほとんどの項目について正答率が30%以下であることを示す。また、それぞれの文法項目を授業でどのように教えるか

について述べる。第4章は、上記(2)と(3)に関わるもので、感覚英文法による言語表現の意味付け指導が大学生の英語学習に与える効果について12項目を取り上げ、その意味付け指導と効果について、プレテストとポストテストの正答率比較と授業内容に関するアンケート(動機づけと深層学習を調べるもの)を実施した研究について述べる。感覚英文法による意味付け指導は効果があること、学習者は学習プロセス自体を価値があり楽しいと感じることが示された。第5章と第6章は、第4章の研究をよりミクロレベルで観察する目的で行ったもので、上記(3)と(4)に関わる。Ausubelの言う「有意味・受容学習」とも整合性があるものと言える。学習者にすべてを教えなくても、学習者のもつ知識(英語の知識のみでなく、背景知識や世界に関する知識も含む)に比喩的に(metaphorically or analogically)取り込めれば、学習者が自らヒントを手掛かりに答えに辿り着けることを実験授業で確かめた。具体的には、第5章では、類似した語彙の意味の違いを理解する方法として、反意語というフレーム知識を視野に入れることの有効性について調べ、その結果、学習者に反意語フレームを意識させる学習法は、ある程度有効であるが、理解には高度な認知能力が要求されることが考えられるため難しい面もあり、この点は、今後の課題として残された。しかし、学習者は、学習プロセス自体の価値は認めている。第6章では、認知言語学の道具立ての1つ、事例化とスキーマ化という認知能力の活用について観察する実験授業を実施し、学習者の事例化とスキーマ化能力の活用について観察した。授業では、学習者の母語である日本語の例から初めて、能力を活性化し、英語の例へと移行した。与えられたヒントと事例化とスキーマ化能力を活用して解答できる正答率は、50%から70%と問題によって違いはあったものの活用できることは確認できた。さらに、アンケート結果から、この授業について価値があると捉えている参加者は90.9%、学習のプロセス自体がおもしろいと捉えている参加者は、74.4%であった。これらの結果から、事例化とスキーマ化のプロセスを意識させることは効果があり、この学び方を参加者は、価値があり、おもしろいと捉えていると言える。第7章では、結論と今後の課題について述べる。結論については、上記、(1)～(4)の仮説は、概ね検証されたと言えること。今後の課題については、教室現場で感覚英文法を使用する場合、teachability(教えやすさ)とlearnability(学びやすさ)の2つを考えることが必要であり、本研究でlearnabilityについてはあると言えるが、teachabilityについては、著者自身が授業をしなくても、他の教員がやっても感覚英文法は効果があることを調べる必要性がある。今後、進めていきたい。